

認知症高齢者との関わり時に看護学生が抱く気持ちへ関連する要因 —看護学生の共感性類型における認知症高齢者イメージ要因からの分析—

高野 真由美¹⁾ 松本 佳子²⁾

要 旨

【目的】 学生の共感性類型における認知症高齢者への肯定的イメージと、認知症高齢者との関わり時に抱く気持ちとの関連を明らかにする。

【方法】 A看護短期大学3年生77名に無記名自記式アンケートを配布し54名を分析した。調査票は、学生が認知症高齢者との関わり時に抱く気持ち、認知症高齢者イメージ、共感経験尺度改訂版（EESR）である。共感性の程度をEESRにて4つに類型化し、認知症高齢者の肯定的イメージと、関わり時に抱く気持ちとの関連について相関係数を算出した。

【結果・考察】 最も高い共感性のタイプの場合、肯定的イメージのあることで、認知症による症状や反応を理解し肯定的な気持ちで関わることに関連することが明らかとなった。一方、他の共感性の低いタイプにおいてはイメージが肯定的でも、認知症による症状や反応を理解できないことがあり、それが関わり時に抱く気持ちと関連することが示唆された。

キーワード：看護学生 共感性 認知症高齢者 イメージ 気持ち

I はじめに

わが国の急速な高齢化にともない、認知症高齢者人口は2014年で、420万人と推計されている。このことから認知症高齢者への看護の質の向上がさらにのぞまれるところであり、看護基礎教育における教育の課題である。しかし、認知症症状は極めて多彩であり、その高齢者の個別的背景や環境によって様ではない。つまり、その時その状況による違いや個人差がありテキスト通りのケアができないことが多い。そのため、看護学生（以下、学生）は実習における認知症高齢者との関わりで、不安や困難な気持ちを抱くことがある。その一方で、認知症高齢者と自然体で楽しさを感じる気持ちで関わる学生もいる。筆者は、この関わり時の気持は、認知症ケアの質を左右すると考え、先行研究¹⁾にて学生が認知症高齢者との関わり時にどのような気持ちを抱いたのかを明らかにした。

認知症のケアについて小田²⁾は、看護師の認知症

高齢者のとらえ方や視点は、共感を意識した見方に変えることで、今まで問題と認識し困難に思っていたことも理解できることに変わる可能性について述べている。つまり、認知症のケアをする人には、個々の認知症高齢者の経験をその人を中心に考えられる共感性が求められているといえる。

また、認知症ケアへ関連する要因として、認知症高齢者へのイメージに関する研究がいくつかある³⁾。木下は⁴⁾、認知症高齢者ケアの授業後に学生の認知症高齢者へのイメージが肯定的に変化したと、知識とイメージの関連を述べている。中村⁵⁾も、認知症高齢者との関わりや理解に、認知症高齢者への肯定的イメージが関連することを述べている。また、金⁶⁾は、高齢者に対するポジティブなイメージが認知症の人に対する肯定的な態度に結び付きやすいこと述べている。さらに佐野⁷⁾は、イメージが、看護に取り組む姿勢を形成する源であると述べている。つまり、イメージと知識は関連があり、認知症ケアに関わる人は、認知症高齢者の心理・行動に関する症状を知識から理解し、認識できること

1) 川崎市立看護短期大学

で、肯定的なイメージがもて、認知症を理解した援助ができることに繋がるといえる。

そこで本研究では先行研究を踏まえ、その人を中心に考えられる共感性と認知症高齢者へ肯定的イメージをもっている人は、認知症による症状や反応を理解し、肯定的な気持ちで関わるができるという、仮説をたて調査することとした。

学生の共感性や、認知症高齢者へのイメージは、看護の学習やケアの経験の中で変化する可能性のある要因である^{8) 9)}。このことから、これらの要因が認知症高齢者との関わり時の気持ちへ関連することを明らかにすることは、今後の老年看護学における認知症高齢者看護の教育を実践するにあたり、基礎的資料を得られる意義があると考えられる。

II 研究目的

共感性を高さや程度によってタイプ別に分類し、そのタイプがもつ肯定的イメージと、関わり時に抱く気持ちの関連をみるため、以下のように目的を設定した。

学生の共感性類型における認知症高齢者への肯定的イメージと、認知症高齢者との関わり時に抱く気持ち(以下、気持ち)との関連を明らかにする

用語の操作的定義

共感：角田¹⁰⁾の定義を引用し、能動的または想像的に相手の立場に自分を置くことで、自分とは異なる存在である相手の感情を体験すること

共感性：共感に関する個人的特性

気持ち：物事に接した時に心が動かされていると感じる感情や思い、考え

認知症高齢者への肯定的イメージ：先行研究を参考に、認知症の心理・行動に関する症状に対し、知識をもって認識できることで、認知症高齢者に対して思い浮かべる肯定的な印象のこと

III 方法

1. 研究デザイン

量的研究

2. 研究協力者(研究対象)

A看護短期大学の3年生で、老年看護学の全ての授業科目の単位を修得後、老年看護学実習を履修した77名のうち協力の得られた54名

(回収率70%)

3. 調査期間

平成29年5月～7月、9月～11月の老年看護学実習Ⅱの実習期間中、各クール終了後の2週間。

4. 調査方法

本調査前に、対象の3年生以外の2年生へ授業後に口頭で協力者のボランティアを募り、調査用紙の文書の読み取り易さや意味がわかるかなど、形式的なことをチェックするために5人にプレテストを実施した。

そして、老年看護学実習Ⅱを修了した学生に、調査の協力依頼の文章と、無記名自記式調査票を配布した。教員の目の届かない事務室前に調査期間中に設置した鍵付BOXにて調査票を回収した。

5. 調査内容

1) 学生の背景

性別、年齢、介護福祉施設での就労経験と、認知症高齢者との同居経験の有無と経験年数。認知症高齢者から世話を受けた経験と、実習以外で認知症高齢者の世話をした経験について「良く有った4点」～「全くなかった1点」の4評定法とした

2) 気持ち

先行研究¹¹⁾にて、介護老人福祉施設実習で学生が認知症高齢者との関わり時に、どのような場面で、どのような気持ちを抱いたかを調査した。その結果、24の具体的場面に伴う気持ちから、抽象的な1場面を削除したものを基に、認知症高齢者との関わり時に抱いた気持ちについて質問調査票の23の質問項目を作成した。気持ち23項目ごとに「全くそうである4点」～「全くそうでない1点」の4評定法とした。

3) 認知症高齢者への肯定的イメージ

認知症高齢者のイメージはSemantic Differential法(以下、SD法)を使い12対の項目について、肯定的表現5点～否定的表現1点とする5評定法とし、点数が高い程、認知症高齢者への肯定的なイメージの高さを示すようにした。

4) 共感経験尺度改訂版(EESR)20項目

共感性の高さの程度については、角田が開発した共感を感情面と認知面からとらえた、個人の共感タイプを判断する共感経験尺度改訂版(以下、EESR)を用いて、4つに類型化した¹²⁾。

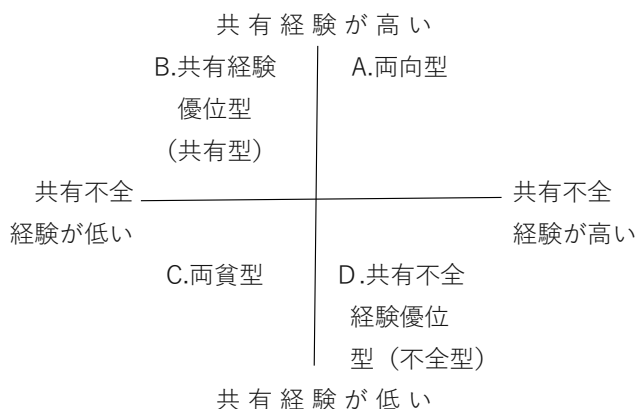


図1 共感性の類型化

このE E S Rは、自他の個別性のあり方の評価と過去の経験に基づいて、個人の共感経験タイプを評価することのできる尺度である。相手の経験を共有できたと自覚した経験「共有経験」と、相手の経験を共有できなかったと自覚した経験「共有不全経験」の下位尺度各10項目の両方を測定しする。1項目の配点は「とてもあてはまる」6点～「まったくあてはまらない」0点の7件法で、各下位尺度得点の中央値を基準に高得点群と低得点群に分け、2つの合わせから4つに類型化する。類型の1つは「両向型」で、これは共有経験と共有不全経験ともに高いことから、最も共感性が高く自他を独立した存在としてとらえるタイプである。二つ目は「共有型」で、共有経験が高く共有不全経験が低いため、共有体験を自己に引き付けてしまう同情的で未熟なタイプである。3つ目は「不全型」で、共有不全経験は高いが共有経験が低い。そのため、自己と他者との間に越え難い障壁があると感じているが、潜在的に他者との関わりをもとうとしているタイプである。「両貧型」は、共有経験と共有不全経験共に低いため、対人関係そのものが弱く共感性は最も低いタイプである。尺度使用については、堀洋道監修¹³⁾「心理測定尺度集Ⅱ」に記述されている注意にそって、背景にある概念や理論を理解し、改編せず使用する。開発者への事前承諾は不要。

6. 分析方法

質問項目ごとに記述統計を行い、全体を概観した。認知症高齢者のイメージは、主因子法・プロマックス回転を行い因子の抽出をして命名し、尺度の信頼係数の測定をした。そして、E E S Rの4

類型における認知症高齢者イメージ因子と、関わり時の気持ちの項目との相関係数を求めた。相関はSpearmanの順位相関係数の算出をした。統計ソフトはSPSS PASW Statistics18を用いた。

7. 倫理的配慮

看護学生に、本研究の趣旨、方法、個人情報の保護、成績へは影響しないこと、協力は自由意志であること、回収BOXへ提出後は撤回できないことについて、文書を用いて口頭で説明し、提出にて同意とした。尚、本研究は川崎市立看護短期大学研究倫理委員会の承認を受けて実施した。(承認R80-1号)

IV 結果

1. 学生背景

調査対象54名の学生背景は、表1の通りである。

2. 認知症高齢者への肯定的イメージの因子分析

学生の認知症高齢者のイメージ12項目に対し、主因子法による因子分析を行った。固有値の変化から2因子が妥当と考えられ、再度2因子を仮定して主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、因子負荷量.400以下の5項目「明るい—暗い」「上品—下品」「強い—弱い」「尊敬できる—尊敬できない」「新しい—古い」を削除し、再度因子分析を行ったところ解釈可能な2つの因子が抽出された。なお、回転前の2因子で7項目の全分散を説明する割合は60.7%であった。第Ⅰ因子は「優しい」「思いやり」「あたたかい」「好き」の4項目で構成されていることから「親和的」と命名した。また、第Ⅱ因子は「役立つ」「さっそう」「積極的」の3項目で構成されていることから「活動的」と命名した。Cronbachの α 信頼係数は、第Ⅰ因子が.745、第Ⅱ因子が.723、全体が.694と、許容範囲の内的整合性が確認された(表2)。

表1 学生背景

(n=54)			
要因	カテゴリー	n	(%)
性別	男	3	(5.6)
	女	51	(94.4)
年齢(歳)	範囲 平均±標準偏差	19歳～35歳 21.8±5.0歳	
介護・福祉施設での就労経験	有り	6	(11.1)
	無し	48	(88.9)
介護・福祉施設での就労経験年数	範囲 平均±標準偏差	0年～7年 0.6±1.4年	
認知症高齢者との同居経験	有り	7	(13.0)
	無し	47	(87.0)
認知症高齢者との同居経験年数	範囲 平均±標準偏差	0年～14年 1.1±1.0年	
認知症高齢者から世話を受けた経験	良くあった	6	(11.1)
	時々あった	3	(5.6)
	ほとんど無かった	10	(18.6)
	全く無かった	35	(64.8)
認知症高齢者の世話をした経験	良くあった	8	(14.8)
	時々あった	2	(3.7)
	ほとんど無かった	11	(20.4)
	全く無かった	33	(66.1)

表2 認知症高齢者のイメージ

		n=54		
		Promax回転後の因子パターン		
因子	項目内容	I	II	信頼係数
親和的	優しいー厳しい	.732	-.347	.745
	思いやりー思いやりがない	.704	.197	
	あたかいーつめたい	.646	-.089	
	好きー嫌い	.560	.325	
活動的	役に立つー役に立たない	.084	.758	.723
	さっそうーみじめ	.065	.753	
	積極的ー消極的	.104	.582	
全体				.694
因子相関		I	II	
	I	—	.230	
	II	.230	—	

2. 共感性をEESRにより4つに類型化

学生のEESR得点は、共有経験（得点範囲0点～60点）の平均値が43.6点±9.5、中央値が45.0点、最小値が13.2点で最大値が60.0点であった。共有不全経験（得点範囲0点～60点）は、平均値が30.0点±13.6、中央値が30.0点、最小値が3.0点で最大が60.0点であった。共有経験及び共有不全経験は、中央値を基準に高得点群と低得点群2つに分けた。そ

して、2つの組み合わせから学生の共感性を4つに類型化したところ、両向型は16名、共有型14名、不全型12名、両貧型12名であった（図2）。

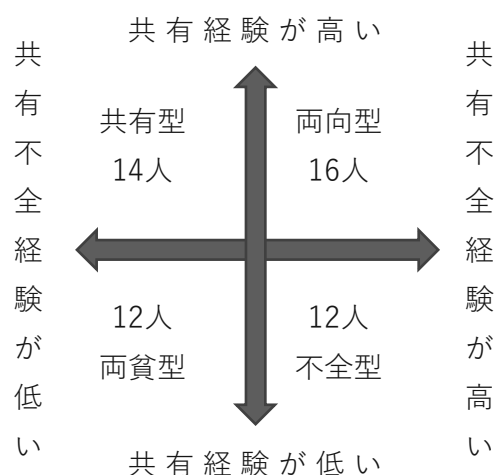


図2 学生の共感性類型別人数

3. 共感性の4つの類型化における認知症高齢者への肯定的イメージと気持ちとの関連

学生の4つに類型化された共感性における、認知症高齢者への親和的イメージ及び活動的イメージ因子と、気持ちとの関連をみたところ、以下の項目において有意な関連を示した(表3)。

両向型における親和的イメージが高い程、気持ちの2項目「3 同じことを繰り返し言うことに意味を感じた」、「12 寛大さに癒された」に正の相関が認められ、「7 自分のことを覚えてもらえてないことがショックを受けた」気持ちに負の相関が認められた。一方、活動的イメージが高い程、「4 話が噛み合わないコミュニケーションが難しかった」気持ちに負の相関が認められた。

共有型における親和的イメージが高い程、気持ちの7項目「5 つじつまの合わない話に悩んだ」、「6 何を言っているのか意味不明でも、受け入れられた」、「8 反応がないと、どうしていいか悩んだ」

だ」、「9 昔のことや人生のことを話してくれて嬉しかった」、「10 初対面の自分たちを受け入れる順応の高さに驚いた」、「11 いろいろ話してくれて楽しかった」、「12 寛大さに癒された」に正の相関が認められた。一方、活動的イメージと気持ちに相関は認められなかった。

不全型における親和的イメージが高い程、気持ち「1 同じことを何度も話されて戸惑った」、「2 繰り返し同じことを言われて困った」に負の相関、「3 同じことを繰り返し言うことに意味を感じた」に正の相関が認められた。一方、活動的イメージが高い程、「4 話が噛み合わないコミュニケーションが難しかった」気持ちとで負の相関が認められた。

両貧型においては、親和的イメージが高い程、「5 つじつまの合わない話に悩んだ」気持ち1項目のみに、正の相関が認められた。

表3 共感性類型におけるイメージと関わり時の気持ちとの関連

イメージ	共感類型	n=54							
		両向型(n=16)		共有型(n=14)		不全型(n=12)		両貧型(n=12)	
		親和的 平均(SD)	活動的 平均(SD)	親和的 平均(SD)	活動的 平均(SD)	親和的 平均(SD)	活動的 平均(SD)	親和的 平均(SD)	活動的 平均(SD)
気持ち		12.8(2.3)	12.2(1.8)	12.4(1.7)	12.1(2.6)	12.6(2.8)	12.1(2.1)	12.6(2.4)	12.0(2.2)
1 同じことを何度も話されて戸惑った						-.786*			
2 繰り返し同じことを言われて困った						-.820*			
3 同じことを繰り返し言うことに意味を感じた	.702*					.832*			
4 話が噛み合わないコミュニケーションが難しかった			-.644*				-.804*		
5 つじつまの合わない話に悩んだ				.687*				.793*	
6 何を言っているのか意味不明でも、受け入れられた				.617*					
7 自分のことを覚えてもらえてないことにショックを受けた	-.751*								
8 反応がないと、どうしていいか悩んだ				.781*					
9 昔のことや人生のことを話してくれて嬉しかった				.715*					
10 初対面の自分たちを受け入れる順応の高さに驚いた				.793*					
11 いろいろ話してくれて楽しかった				.715*					
12 寛大さに癒された	.727*			.786**					
13 何度も同じ話をするにどうしていいの不安になった									
14 同じことを何度もきかれて面倒になった									
15 同じことを何度も言われても受け入れられた									
16 同じことの繰り返しで話が進まない悩んだ									
17 意味不明な話でも個性があり1人1人の世界観があると受け入れられた									
18 自分のことを覚えてもらえてないことが悲しかった									
19 突然大声をあげ、怒鳴られて驚いた									
20 暴力を振るわれると、関わるのが難しかった									
21 反応が無いこともあるのは、認知症だからと納得した									
22 突然大声をあげ、怒鳴られても受け止められた									
23 覚えていないことに戸惑った									

* $P < .05$ ** $P < .01$

注) 23項目中、13～23は有意とならなかった項目

V 考察

共感性の4つの類型ごとに、認知症高齢者への肯定的イメージと、関わり時の気持ちとの関連を考察する。

1. 両向型における認知症高齢者への肯定的イメージと気持ちとの関連

最も共感性の高い両向型における認知症高齢者への親和的イメージが高い程、「自分のことを覚えてもらえてないことにショックを受けた」という否定的な気持ちに負の相関を示した。さらに、活動的イメージが高い程、「話がかみ合わないコミュニケーションが難しかった」という否定的気持ちに負の相関を示した。

援助に役立つ共感には、自分と相手を区別しながら相手の立場に立とうとする態度が求められる¹⁴⁾と、共感における客観性の必要が述べられている。つまり、共感性の高い学生は、相手の反応を単に自己の感情でとらえるのではなく、客観的視点で相手の状況をとらえていると考えられる。そのため、「自分のことを覚えてもらえてない」「話がかみ合わないコミュニケーション」という状況を、客観的視点から、記憶障害と捉えることがでたと考えられる。さらに、親和的・活動的イメージが高い程、知識から記憶障害を認知症の症状であると判断できたため、関わり時の気持ちが否定的にならないように関連したと推測される。また、親和的イメージが高い程、「同じことを繰り返し言うことに意味を感じた」「寛大さに癒された」という、肯定的な気持ちを高く感じていた。これは、「同じことを繰り返し言うこと」を、単なる認知症による記憶障害として理解していなかったことを示している。すなわち、相手の思いや感情を感じ取ろうとする共感性の高さと、さらに親和的イメージが高い程、認知症高齢者にとって繰り返し言動は大切な意味があるという、認識に繋がったからと考えられる。また、このようなポジティブな認識からの理解は、認知症高齢者が持っている強みである寛容さに着目出来たことで、「癒された」気持ちに関連したと推測される。

以上より、相手の思いや感情を感じ取る共感性が高く、認知症高齢者への肯定的なイメージを持っている学生は、症状や反応を理解し、関わり時に肯定的な気持ちを高めることとの関連が示唆される。

2. 共有型における認知症高齢者への肯定的イメージと気持ちとの関連

共有型では、親和的イメージが高い程、「つじつまの合わない話に悩んだ」「反応がないと、どうしていいか悩んだ」という否定的な気持ちに関連を示した。これは、共有型のもつ、共有経験は高いが共有不全経験が低いことから、「つじつまの合わない話」「反応がない」という状況を客観的視点に症状としてとらえることが、できないためと考えられる。さらに、共有経験の高さから、相手のことをわかっているという強い思いがある。その強い思いによる主観的感情があると、親和的イメージが高く知識があっても、状況を自己の感情に引き付けて認識しようとする傾向が推察される。そのため記憶障害など認知症症状が関連する場面では、状況を客観的に理解できず、対応ができないために「悩む」など否定的な気持ちに繋がると推測される。

一方、「何を言っているか意味不明でも受け入れられた」「昔のことや人生のことを話してくれて嬉しかった」「初対面の自分たちを受け入れる順応の高さに驚いた」「いろいろ話をしてくれて楽しかった」「寛大さに癒された」という、肯定的な気持ちに、最も多くの項目で関連が示された。これは共有型の特徴に、自他区別できない共有不全経験が低く、共有経験の高さから同情傾向がある。この同情傾向があると、親和的イメージが高い程「話せた」「話してもらえた」など、ポジティブな側面が強調され、さらに、自己の思いや感じ方に引き付けた解釈によって、「受け入れられた」「嬉しかった」「順応の高さに驚いた」「楽しかった」「癒された」という肯定的な気持ちの高さに関連すると推察される。本調査ではその解釈が、正しいか否かまでは判断できない。しかし、共有型においては、認知症高齢者への肯定的イメージが高い程、親和的な面からの認識が同情傾向との相乗効果によって、高齢者の反応を解釈し認識しようとする可能性が推測される。

以上から、共有型においては、認知症高齢者への肯定的なイメージが高くても、主観的感情や自己解釈による認識が、気持ちに関連することが推察される。

3. 不全型における認知症高齢者への肯定的イメージと気持ちとの関連

不全型において親和的イメージが高い程、気持ちの「同じことを何度も話されて戸惑った」「繰り返し同じことを言われて困った」に、負の相関が認められた。また活動的イメージが高い程「話がかみ合わない」とコミュニケーションが難しかった」気持ちに、負の相関があった。この不全型のタイプは、共有不全経験が高く、状況を客観的に認識できるため「同じことを何度も話され」「繰り返し同じことを言われ」「話がかみ合わない」とコミュニケーション」を記憶障害としてとらえることができたと考えられる。そこに、親和的・活動的イメージによるポジティブな認識から、認知症の症状を理解することができるため、否定的な気持ちの低さに関連したと推測される。

一方、親和的イメージが高い程、「同じことを繰り返し言うことに意味を感じた」気持ちに、正の相関が認められた。不全型は、客観的性が高いことから「同じことを繰り返し言う」状況を症状として認識できると考えられる。また不全型の特徴として、共有経験が低いと、相手の気持ちは感じ取れない一方で、潜在的に他者との関わりをもとうとすることがある。そこに、親和的イメージによるポジティブな認識があることで「同じことを繰り返し言うことに意味を感じた」とう肯定的気持ちに関連したと考えられる。つまり、共有経験の低い不全型において、認知症高齢者への肯定的イメージが高い程、関わり時の気持ちが肯定的であることに関連する可能性が考えられる。

4. 両質型における認知症高齢者への肯定的イメージと気持ちとの関連

両質型は共有経験と共有不全経験がともに低く、最も共感性が低いタイプである。すなわち、相手の状況に対し無気力、無関心といった傾向にあると、とらえられる。そのことは、本調査で4つの共感性類型のなかで関連を示した項目が、最も少ない1項目のみであったことからいえる。その項目は、親和的イメージが高い程「つじつまの合わない話に悩んだ」気持ちに、正の相関がみられた項目であった。これは、共有経験の低さから、相手の体験している状況に関心をよせた理解ができないと考えられる。すなわち、相手の視点からわかろうとせず、自

身のもつ肯定的なイメージによる知識と認識によって理解し、対応しようとした結果、「つじつまの合わない話」に対応できないために、困難感が生じたと推察される。その自身の困難感の気持ちが優先されるために、「悩む」否定的な気持ちが高くなると推測される。

以上より、共感性の低い両質型における認知症高齢者への肯定的イメージと気持ちとの関連を示す項目は、最も少なかった。そして、唯一関連のあった項目から、共感性が低いと肯定的イメージが高くても、症状や反応を理解し、肯定的気持ちで関わることに関連を示さないことが示唆される。

Ⅵ 研究の限界と今後の課題

本研究は、54名を対象としており一般化できるほどのデータ数ではない。また、認知症高齢者との関わり時の気持ちは、研究者が作成した調査項目であり、厳密には信頼性と妥当性の検証はされていない。さらに、相関係数の強さから、イメージの2因子と気持ちの項目間には交絡要因を含むことや、54名の調査対象者人数の少なさからの誤差があることは否めない。また、共感とイメージが看護の質にどう影響を及ぼすのかまで明らかにした先行研究がないことから、考察には研究者の解釈からの偏りもある。

しかし、今回は、限られたデータと調査票ではあるが、本研究の結果、学生の共感性や認知症高齢者へのイメージは、関わり時に何らかの影響を与えることは明らかである。今後さらに、調査票の内容を検討し調査し、今後の老年看護学における、認知症看護の教育方法に活かしていきたい。

Ⅶ 結論

学生の共感性類型における認知症高齢者への肯定的イメージと関わり時に抱く気持ちとの関連の結果から、以下のことが明らかとなった。

1. 最も共感性の高い両向型では、認知症高齢者への肯定的なイメージが高い程、症状や反応を理解し、関わり時に肯定的な気持ちを高めることと関連していると考えられる。
2. 共有型においては、認知症高齢者への肯定的なイメージが高くても、主観的感情や自己解釈による認識が、関わり時の気持ちに関連することが推察される。

3. 不全型においては、認知症高齢者への肯定的イメージが高い程、関わり時の肯定的気持ちに関連することが示唆される。
4. 両貧型では、共感性が低いと、認知症高齢者への肯定的イメージが高くて、症状や反応を理解し、肯定的気持ちで関わることに関連を示さないことが示唆される。

VIII おわりに

今後学生の認知症高齢者のイメージが肯定的となるような実習の検討をしていきたい。

さらに共有経験と共有不全経験から自他個別性の認識が他者理解につながり、共感性を育むような経験型学習を検討したい。

そして、学生自身が自己の共感性類型を認識することで、認知症高齢者との関わりを内省できるよう支援することが大切といえる。

[利益相反]

本研究に関連して開示すべき利益相反関係にある企業等はない。

[著者資格]

T Nは研究の着想およびデザイン、データ収集と分析、最終原稿作成のプロセス全体に関わった。M Kはデータ収集と分析、草稿の作成に関わった。すべての著者は最終原稿を読み、承認した。

引用文献

- 1) 高野真由美, 松本佳子. 老年看護学実習 I で看護学生が認知症高齢者との関わり時に抱いた気持ち. 川崎市立看護短期大学紀要. 21, (3), 2016, p. 31-38.
- 2) 小田沙矢香, 川島和代. 急性期一般病棟における看護師の認知症高齢者へ共感に関連する要因. 日本看護研究学会雑誌. 39, 1, 2016, p. 33-42.
- 3) 松本明美. 認知症高齢者に対するイメージの縦断的調査と認知症高齢者の看護観の形成. 足利短期大学研究紀要. 第30巻, 1号, 2010, p. 73-80.
- 4) 木村香織. 「認知症の高齢者のケア」授業前後における看護学生の認知症の高齢者イメージの変化. 新見公立大学紀要, 42, 2016, p. 35-40.
- 5) 中村勝善, 高木初子. 看護学生の認知症高齢者に対するイメージと影響要因の文献検討. 聖徳大学研究紀要. 第26号, 2015, p. 93-99.
- 6) 金高閭, 黒田研二. 認知症の人に対する態度に関連する要因—認知症に関する態度尺度と知識尺度の作成—, 社会医学研究, 28(1), 2011, p. 43-55.
- 7) 佐野望, 中澤明美. 一般病院に勤務する臨床看護師の認知症に対する知識とイメージの関連. 共立女子短期大学看護学科紀要. 第4号, 2009, p. 57-65.
- 8) 前掲3)
- 9) 前掲2)
- 10) 角田豊. 共感経験尺度改訂版 (EESR) の作成と共感性の類型化の試み. 教育心理学研究. 第42巻, 2号, 1994, p. 76-83.
- 11) 前掲1)
- 12) 前掲10)
- 13) 堀洋道監修, 吉田富二雄編. 心理測定尺度集Ⅱ—人間と社会のつながりをとらえる〈対人関係・価値観〉—. サイエンス社, 2007, p. 1-6.
- 14) ルース・C・マッケイ, 河合美子. 共感的看護と理解. 医学書院, 1991, p. 65.